

校長室だより
NO. 15
令和元年6月24日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高 須 亮 平

「考え、議論する道徳」の授業を実践する

来年度、小学校の学習指導要領が改訂され、これまでの道徳は、正式に新しい教科になります。実際には、もう昨年度より前倒しされ、教科書が配付されて授業が行われています。これまでとの違いは、答えが一つではない課題に「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、自分とは異なる意見をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えることにあります。そして、道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めていきます。そのことを通して、子どもの道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てていきます。さらに、教科にすることによって、問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、効果的な指導方法を明確化し、すべての教員が習得できるようにすることもねらいとなっています。その他、道徳の教材として具体的な人物や地域、わが国の伝統と文化に根ざす題材等も重視されています。

そのようなことから、6月19日（水）に本校の道徳授業研究会を設定し、西尾市立西野町小学校の石川雅春校長先生に來校いただき、具体的な授業を通して道徳教育を学ぶことにしました。石川先生は、愛知県では道徳教育の第一人者で、ご自身が若い頃から道徳の授業実践を豊富に行ってきた先生です。公開授業は、6年4組の本田裕子先生、1年3組の奥田美里先生が行いました。その授業についてお知らせします。

まず、6年4組の授業です。教材文は「6年生の責任って」（全文は裏面）を使って、「最高学年の責任」について考えました。本文に登場する人物の考えについて、6年4組の子どもたちは自分はどう思うかを話し合い、そのことを通して、自分としての最高学年の責任について再認識していきました。話は、登場人物の1人である「ぼく」が廊下に置きっぱなしにされたぞうきんを見かけたことに始まりました。そして、「最高学年としてできること」についての学級会で、この「ぼく」が話題にしました。その中で「ぼく」は言いました。「きれいな学校にするために6年生が見回って片付けたらどうか」と。それに対して、登場人物の2人目「山本さん」が言いました。「それは美化委員（本校では梅ピカ）の仕事で、自分に与えられた仕事をするのが6年生としての責任ではないか」と。次に、登場人物の3人目「横山さん」がこう言いました。「どちらも高学年がやれば学校はきれいになるけど、6年生が卒業したらまた元に戻ってしまうから、どちらにも反対」と。



6年4組道徳科「6年生の責任って」

この3人の登場人物は、どの考えも6年生としての責任を持って考えているようです。しかし、学級としてどのようにしたらよいかは明確になっていませんので、これをどうしていくかを考えることが、この教材文のポイントになります。そこで、本田先生は、子どもたちに登

場人物3人の考えについてじっくり考える場を持ちました。「ぼく」に対しては多くの子が賛同し、自分から動き出そうとする意欲を示しました。そして、「横山さん」にもかわり、自分たちが気付いてお手本となって率先して動き、他の学年に教えたり、ポスターや放送などで呼びかけたりして気付いてもらうというように考えました。

その中で、本音を出して「本当は面倒だからやりたくない」「遊びに行く途中だったら、ぞうきんを見ても片付けない」「帰りであれば片付けるかも」などという意見も出されました。これは、6年4組の学級が何でも言いやすく、受け入れられる温かい雰囲気での学級だからのことだと思います。そのような子どもも、登場人物3人の考えや6年4組の友達の考えとかかわる中で、よりよい学校にするために最高学年として責任をもって行うことについて、前向きに意識することになっていきました。それは、次のような子どもの感想からも分かりました。

「授業だからいい発言を言おうって思って、口だけになってしまわないように、自分の意見を頭に入れておいて、そういう場面があったらしっかりと行動して1～5年生のお手本になれる行動をしていきたいと思いました。さらにお手本になれば、今年で終わりではなく、今の5年生が6年生になったときも同じようにしてもらいたいです。」

次に、1年3組の授業です。教材文は「はしのうえのおおかみ」（全文は裏面）を使って、「親切」について考えました。話は、一本橋の上でうさぎなどを追い返していたおおかみは、自分より大きなくまに出会いました。慌てて戻ろうとするおおかみでしたが、くまはおおかみを抱き上げて、後ろへそっとおろして通らせた。次の日、一本橋の上でまたうさぎに出会い、くまのまねをしてうさぎを抱き上げてそっとおろして通らせたという



1年3組道徳科「はしの うえの おおかみ」

ものです。奥田先生は、このおおかみの変化していく心情に焦点をあて、親切にするよさについて考えることができるように工夫して授業を展開しました。

まず、紙芝居でお話の展開の理解を図った上で、おおかみの心情について考えることができるように、子どもたちが、それぞれの動物になって体験する場を設定しました。そこでは、くま役の子がおおかみ役の子を抱きかかえたり、おおかみ役の子がうさぎ役の子を抱きかかえたりする中で、おおかみの気持ちの変化に触れていく子どもたちがいました。特に、おおかみの「えへん、へん」という言葉が、うさぎを追い返していたときと、うさぎを抱き上げて通らせたときと2回出てきますので、そのとき



石川雅春先生からのご指導

のおおかみの気持ちの変化を考えるようにしました。そこでは、子どもたちは、後者の方が「前よりずっといい気持ち」「前より優しいことをしたから前よりよかった」「すごくいいことをしたときの気持ち」と答えていました。最後に、先生の「この後のおおかみはどんなおおかみになりましたか」との問いに、「これからもいいことをするおおかみ」「仕事を手伝ってあげるおおかみ」というように「親切」について道徳的な価値に気付いていきました。

「六年生の責任って」 (6年教材)

清掃の時間が終わった。ぼくのグループは、理科室のそうじだった。そうじが終わり教室へもどる途中、ろう下に置きっぱなしのぞうきんがあるのに気がついたぼくは、それをゆすいで、ぞうきんかけにかけた。そういえばこの前は、四年生のそうじ用具入れから、ほうきがはみ出していた。

六時間目は、学級活動で話し合いをする時間だ。「今日は、『最高学年としてできること』について話し合います。何か提案はありませんか。」

議長 の言葉に、ぼくは、さっと手を挙げた。「清掃の後、ぞうきんやほうきが出しっぱなしになっていることがあります。だらしがないので、六年生が見回って片づけてはどうでしょうか。ぼくたち六年生で、きれいな学校にしたいと思うんです。」

すぐさま副議長 が、議事を進行する。

「今の意見について、どう思いますか。」

すると、山本さんが手を挙げた。「それは、美化委員会の仕事だと思います。せっかく委員会という組織があるんだから、それをもっと有効に活用するべきです。」

「それじゃ、ぼくたちは知らんぷりをしていいって言うのかよ。」

高橋君が声を上げると、意見のある人は、手を挙げてください。」

と、議長 に注意された。再び山本さんが手を挙げる。

「『知らんぷり』なんかじゃありません。私たちはそれぞれ、何らかの委員会に入っています。自分にあたえられた委員会の仕事をしっかりやるのが、六年生としての責任なんじゃないかと思うんです。」

ぼくは、もう一度手を挙げた。

「委員会に任せ切りじゃなくて、ぼくたちができることを無理のない範囲でやっても、いいんじゃないでしょうか。それが、最高学年としての責任だと思います。」

数人から拍手が起きる。すると、今度は横山さんが手を挙げた。

「どちらも高学年がやれば、それで学校はきれいになるのかもしれない。だけど、私たち六年生が卒業してしまったら、また元にもどってしまうのではないでしょう。それは、本当にきれいな学校になったといえるのでしょうか。私は、六年生が片づけるのも、美化委員会が片づけるのも反対です。」

教室が、一瞬しんとした。

この後も、クラスではそれぞれの考 えで意見が出された。

ぼくは、自分で提案しておきながら、何が六年生としての責任なのか、頭の中がすっかり混乱してしまった。



「はしの うへの おおかみ」 (1年教材)

やまの なかに、いっぼんばしが ありました。

ある あさ、うさぎが ゆっくりと はしを わたって いると、むこうから、おおかみが やって きました。

「こら、こら。」

と、おおかみは、うさぎを にらみつけました。

「おれが わたって きたのに きが つかなかったのか。

もどれ、もどれ。」

おおかみに どなられて、うさぎは、しかたなく うしろに もどりました。

「えへん、へん。」

おおかみは いい きもちです。

それからと いう もの、おおかみは、この いじわるが おもしろく になりました。

きつねが きても、たぬきが きても、

「こら こら。もどれ、もどれ。」

と、みんなを うしろに おいかえしました。

ある ひの ゆうがた、おおかみが、いつものように はしを わたって いると、はしの まんなかで、だれかに ぶつかりました。

「こら、こら。」

と いいかけて、おおかみは びっくりしました。めの まえに、おおきな くまが たって いたのです。

おおかみは、あわてて おじぎを しました。

「これは、これは。くまさんでしたか。わたしが うしろに もどります。」

すると、くまは、

「いや、いや、おおかみくん。そんな こと しなくて いいんだよ。ほら、こう すれば いいのさ。」

くまは、おおかみを だきあげると、そっと うしろに おろしてくれました。

おおかみは、ふしぎな きもちに なって くまの うしろすがたを、いつまでも みおくって いました。

つぎの ひです。おおかみは、いっぼんばしの まんなかで、うさぎに あいました。

うさぎは、あわてて ひきかえそうと しました。おおかみは、やさしく よびとめました。

「いや、いや。うさぎくん。そんな こと しなくて いいんだよ。

ほら、こうすれば いいのさ。」

おおかみは、うさぎを だきあげて、そっと うしろに おろしてあげました。

「えへん、へん。」

いい きもちです。

ふしぎな ことに、おおかみは、まえより ずっと いい きもちになりました。

